



九頭七尾

Kuzu Shichio

illustration

かぼちゃ

Kabotya

転生担当女神が100人いたのぞ

チートスキル
100個貰えた

超級魔法 地獄ノ業火!

「……マスター、オーバーキルにもほやがあるかぞ。」
この辺りの地形でも変えるつもりですか。」

ナビ子様

カルナ

エリン





「はじめまして、東城カルナさん」

名前を呼ばれて、ゆっくりと瞼を開く。すると目の前に女の子がいた。

うお、何だこの美少女?

アイドル? いや、アイドルでも見たことないくらい可愛いぞ?

なんか全身から光が出てるしな。

って、光? どういうことだ? 普通、人間の身体から光なんて出ねえだろ。

しかもすごい髪の色だ。

まるで鏡のような煌めく長い銀髪。こんな髪、外国人でも見かけないぞ。

辺りは何もない、ただ真っ白いだけの空間だった。

俺はそこにふわふわと浮かんでいて、少女もまた俺の眼前で宙を浮遊している。

一体何が起こっているんだ?

俺が大いに困惑していると、その少女がにっこりと微笑みかけてきた。

なんて眩しい笑顔だ……っ!

「私は女神——女神アジアです」

「め、女神……?」

「はい。どうやらまだ混乱されていらっしやるようですね。無理ありません。死というものは唐突に訪れるものですから」

痛ましいものでも見たかのように、彼女は顔を少し俯かせ、眉尻を下げた。

「え……? 俺……もしかして、死んだのか……?」

「はい。残念ですが、カルナさんは亡くなられました。死に際のショックで覚えておいでではないかもしれませんが、交通事故により——」

「よっしやああああっ!!」

彼女の言葉を遮り、俺は思わずガッツポーズを決めながら叫んでいた。

少女——いや、女神様か——は、ポカーンと呆気にとられたような顔をする。

「あの……亡くなられたのですよ?」

「だよな!? それで、これから異世界に行けるんだよな!?」

「え、ええ……」

俺が前のめり気味に確認すると、彼女は少し身を引いた。

「いや、悪い。実は俺、異世界転生するのが夢だったんだ」

エルフにドワーフに獣人に吸血鬼。

スライムにゴブリンにコボルドにオーク。

色んな種族がいて、色んな魔物がいて。

それから魔法や伝説の武器なんかがあつて。

俺がイメージしているのは、いわゆる「剣と魔法のファンタジー世界」なんだが……俺は、昔からそんな異世界が好きだった。

そしていつか死んだら、転生してみたいって思ってたんだ。

まさかそれが本当に実現するとは。

「か、変わってますね……」

「確かにそうかもしれないな。で、どんな世界に行けるんだ？ 何かスキルみたいなゲームっぽい設定はあるのか？ できればエルフとかドワーフみたいなのがいる世界がいいんだけど。あ、もちろん魔法は必須だよ必須！ 魔王はいてもいなくてもどっちでも構わないけど、人間たちと戦争とかしてない方がいいな！ 俺あつさり死にたくないし！」

「……カルナさん」

「はい！」

「とりあえず、落ち着いてください」

「あ、はい」



女神様によると、これから俺が転生することになる世界は、まさしく俺がイメージしていたような剣と魔法のファンタジー世界らしい。

転生するか、天国に行くか。

一応、どちらかを選ぶことができるらしいが、当然ながら俺は転生一択だ。

さらに、どうやら俺が今まで生きてきた世界の方が魂魄こんぱくの質が高く、転生により生じる不均衡を是正するためとか何とかで、好きな能力——スキルを一つ手に入れることが可能なのだという。つまりは転生特典というやつだ。

「どれにしようかな……」

虚空に文字が浮かび上がり、獲得可能なスキル名とその簡単な説明文がずらりと並んでいた。

さすがは転生特典というだけあって、どれもこれも強力そうなものばかりだ。

当然、すごく悩む。

いずれも捨てがたいものばかりだし、この選択が俺の新たな人生を決定づけると言っても過言ではない。

「これ、やっぱり一つだけ？」

「一つだけです」

「そこをなんとか」

「一つだけです」

「いよっ、女神アーシア様超絶美女！ ナイスバディ！」

「褒めても一つだけです」

ぐぬぬ……やっぱ駄目か。

俺は散々迷ったが、最終的には何とか一つのスキルを選んだ。

仕方がない。まあこれ一つでも怖ろしく強力なスキルなんだし、これ以上を望むのは贅沢ぜいたくというものだろう。

「カルナさんの新たな人生に、幸多からんことを」

そして俺は女神様に見送られ、ついに念願の異世界へと旅立った——

「あなたが東城カルナね。あたしは女神。女神イスリナよ。今回はあなたの魂の導き手として選ばれたわ」

—— さすが、気がつくくと目の前に別の美少女がいた。

しかもまた自分が女神だと言っている。

どうということだ？

困惑する俺の様子を、彼女は死んでまだ戸惑っている状態だと勘違いしたらしく、

「ま、状況が呑み込めていないのも無理ないわね。特に交通事故っていうのは突発的に死んじゃうものだし」

「は、はあ……」

こっちとしては曖昧あいまいに頷くことしかできない。

ちなみに先ほどアーシアと名乗った温和な女神様と違い、自尊心の強そうな女神様だ。

それから女神イスリナは、女神アーシアとまったく同じ説明を聞かせてくれた。

「というわけで、転生特典として一つだけ、あなたはスキルを手に入れることができるわ」

俺の目の前に、スキル名がずらりと並んだ画面が出現するのも同じだった。

スキル名まで先ほど見たものとまったく一緒だ。

だが、俺が先ほど選んだスキルの名前だけががない。

あれは無かったことになってんのかな？

それとも、すでに獲得済み？

俺はちらりと女神イスリナに視線を向ける。

……黙っておくか。

俺は二度目のスキル選びをスタートした。

いったん目を通していたということもあって、今度はすんなり——とはいかず、また迷いまくってしまった。

欲しいスキルが多すぎるんだよ。

てか、そもそも全部で何個あるんだ、これ？

……九十七……九十八……九十九！

さっきのと合わせると百個もあるのか！

そりゃ時間もかかるだろう。

自動的に決まってしまうケースもあることを思えば、選べるというのにはありがたい。

しかし次がつかえているのか、女神様は「早くしてよ」とプレッシャーをかけてくる。

俺は「もう決まるところ！ 頭の中では決まった！」などと蕎麦屋そばの出前のようなことを言いつつ、じっくり時間をかけてスキルを選択した。

「……ようやく決まったみたいね。じゃあ、頑張つて。あんたの新しい世界での活躍に期待しているわ」

そうして俺は、今度こそ本当に異世界へ――

「わたくしは女神ウエルミスですわ」

――どうなってんの!?

◇ ◇ ◇

「あれ、おかしいね。君、選べるスキル一つしかないんだね」

「みたいだな」

「しかもそれ、使いどころが限られてて不人気なやつだね。うーん、どうやら君には才能がなかったみたいだ。残念」

「そっかー。じゃ、そのスキルで」

「……随分と平然としてるね？」

「だって才能がないんじゃない、仕方ないだろ」

「ふーん。ま、いいや。んじゃ、頑張つてちょよ」

「ああ。ありがとな、女神様」

礼を言うと、俺の身体が光に包まれ始めた。

バイバイ、と手を振ってくる女神様に手を振り返しながら、俺は思わずほくそ笑む。

結局、俺は全部で百柱もの女神様に会った。

そして、それぞれから別々のスキルを――つまり全部で百個も――頂戴したのだ！

長かった。

むちゃくちゃ長かった。

なんたって、まったく同じ説明を百回も受けたんだからな。

だがついに、俺は異世界にやって来たのだ。

「いっせかっい、だーっ！」



第2話 ガイドさんはとても優秀

俺はついに夢にまで見た異世界にやってきた。

さあ、この世界を満喫しよう——と思いきや、見渡す限り、木、木、木、木、木。

どう見ても森の中だった。

……どっちに行けばいいんだろうか。

いきなりこんなところに飛ばされるとは思わなかったぞ。

『南東方向におよそ五キロ進めば、森を抜けることが可能です。さらにそこから東に真^まっ直^すぐ行けば、およそ十キロ先に町があります』

不意に、どこからともなくそんな声が聞こえてきた。だが周囲には誰もいない。

まさか、心に直接語りかけてきている!?

『申し遅れました、マスター。わたくしはマスターが取得された〈ナビゲーション道案内・極〉スキルです』

「おお、そう言えばそんなスキルも取っていたっけ。よろしく」
いわゆるガイドさんというやつだ。

女の人の声で、淡々とはしているものの、どこことなく人間味を感じさせられる。

「もつと機械的なものかと思ってたんだが」

『レベルの低い〈道案内〉であればそうです。ですがマスターは当スキルを極めておいでですので、このように擬似的な人格を有しております。情報量は元より、マスターに合わせて情報を取捨選択して提供するなど、より高度な機能も備えております』

なるほど。これはありがたい。

『罵倒や嘲笑といった、マスターへの言葉責め機能も備えております』

「その機能必要？」

俺はMじゃねえ。

だが少し気になる。いつか試してみよう。

「ところで俺、ちゃんと百個のスキルを獲得できているのか？」

『はい。間違いなく獲得しております』

おっしや。

まったく同じ説明を百回も受けるのはマジでしんどかったが、そんなこと全部のチートスキルを手に入れた俺の前途を思えば大したものではない。

俺はこの百個のスキルを使って——異世界をめいっぱい満喫してやる！

ただ、ちよつと不安もあった。

「大丈夫なのか？ 女神にバレたら怒られたりしない？」

『通常、転生を担当する女神が百柱いらつしゃるといいうのは、あり得ないことです。ですが問題はないかと。なぜならマスターは、然るべき手順で獲得しておりますので』

ふむ。〈道案内・極〉さんが言うのなら大丈夫なのだろう。

「しかし〈道案内・極〉つて長いな。何て呼べばいい？」

『お好きにお呼びください』

「じゃあナビ子さんで」

『……』

「あれ、反応なし？」

『……申し訳ありません。マスターのネーミングセンスが思いのほか酷く、しばしフリーズしてしまいました』

「意外と辛辣だな!？」

早速、罵倒されたよ。

結構いい名前だと思っただけだな。ナビ子さん。かわいいし。

「じゃあナビ子さんな」

『……あえてそのまま押し通すその姿勢に驚嘆します』

「おお、ありがとなー！」

『いいえ、マスター。今のは褒めてません』

まさかそのツッコミをしてるとは……。

ナビ子さん、なかなかやるじゃないか。

——がさがさ。

そのとき、近くから木の葉が擦れる音が聞こえてきた。
ん？ 何かいるぞ？

直後、草むらの奥から大きな生き物が姿を現す。

豚の頭を持つ二足歩行の怪物——オークだった。

「おおおつ、マジで豚が二本の足で歩いてる！」
って、感動している場合じゃない。

俺は何の武器も持っていないし、服も向こうで着ていたもののみまだ。

一方のオークは、手に槍やりのようなものを持っていた。

身長は百八センチくらいあって、ガタイも良い。プロレスラーみたいな体格だ。

つか、最初はスライムとかゴブリンだろ？ 何でいきなりオークなんだよ。

オークって言ったなら、こいつをソロで倒せば冒険者として一人前として認められる的な存在だよな？

「ちなみに俺の今のレベルは？」

『1です』

「レベル1ってオークを倒せる？」

『不可能です』

やべーじゃん。

『もつとも、それは普通の人間のレベル1であれば、の話です』

「つまり？」

『まず〈鑑定・極〉を使って、オークを鑑定してみてください』

「鑑定って、どうやって……あ、できた」

どうスキルを使うのかということも、どうやら頭の中にインプットされているらしい。

オークA

種族：緑オーク族

レベル：23

スキル：〈槍技〉

視界の端に文字が浮かび上がった。

『もっと詳しく各アビリティを見ることも可能です』

「やってみる」

魔力…31／31
筋力…131
物耐…137
魔耐…48
器用…76
敏捷…98
運…32

『今度はご自身のステータスを確認してみてください。鑑定でもいいですが、【ステータスオーブ
ン】と唱えていただいても構いません』

「ステータスツ、オーブツツツッ！！！」

『そんなにカッコつける必要はありません』

いいじゃんかよー。

カルナ 20歳

種族…人族

レベル…1

スキル…ナビゲーション道案内・極<鑑定・極<言語理解・極<身体強化・極……

スキルはちょっと多すぎて見るのがしんどい……。
各アビリティを確かめてみる。

生命…9999／9999
魔力…9999／9999
筋力…999
物耐…999
魔耐…999
器用…999
敏捷…999
運…999

「どこがレベル1!?」

全部カリストしてるじゃねーか。

『スキルのお陰です。例えば<身体強化・極>スキルは、生命力に+9999、筋力、物耐、器用、
敏捷値にそれぞれ+9999されます』

「あ、うん。つまり素の能力とかどうでもいいわけね」

『ちなみにマスターは〈限界突破〉スキルを持つているため、見かけ上はカンストしていても、実際にはそれ以上の数値です。〈鑑定・極〉であればその詳細を見ることも可能ですが?』

「今はいいや。とりあえず、あのオークさんをどうにかしよう」
向こうも俺に気づいたようだし。

「ブヒオツ!」という豚っぽい雄叫びを上げて突進してくる。
その勢いのままに、俺の胸を目がけて槍を突き出してきた。

「よっと」

俺はそれを跳び上がって軽々回避——ちよっと地面を蹴っただけで二メートル近く跳んでしまっただけ——すると、オークの顔面に膝蹴りをぶちかました。

ごぎゅっ。

うお、何かやばい音がしたぞ!?

首が後方に折れ曲がったオークが、物凄い勢いで吹っ飛んでいく。

やがて大木にグシヤツと激突した。

確実に死んだな……。

中身がアレして、かなりグロテスクな感じになってるし。

『オーバークイルです。400しかHPがない敵に、9999を超えるダメージを与えてどうするのですか』

「ダメージまでカンストしやがった!?!」

今は相手が魔物だったから良いけど、人間を相手にするようなときには手加減しないといけないな……。

『魔物の素材を高値で売るためにも、できるだけ綺麗な状態のまま仕留めてください』

「へいへい。おっ、武器も鑑定できるのか」

・石の槍：攻撃力+13

俺はオークが使っていた槍を拾い上げると、適当に振り回してみた。

おおっ、すごい。

まるで何年も使っていたかのように手に馴染むし、覚えた記憶も無いのに色んな槍技を繰り出せる。

『〈武神〉の効果ですね』

あらゆる武芸に通じるようになるというスキルらしい。

『〈武芸〉というスキルは、汎用性が高い反面、特定の武器における効果は〈剣技〉〈槍技〉などの各専門スキルに劣ります。ただし〈武芸〉の最上位スキルである〈武神〉となると話は別。専門スキルと何ら遜色のない効力を発揮します』

「そもそも武器を使う必要すらなさそうだけどな」

大抵の敵は腹パン一発で仕留められそうだ。

「しかしこの森にいる魔物はオークだけか？」

『いいえ、マスター。その他、七種類ほどの魔物が棲息しています。ですが、オークの数が最も多いようです。なお、近くにオークの巣があります』

「オークの巣？」

『千里眼』をお使いいただければ分かりますか？』

言われた通り、俺は〈千里眼〉スキルを使ってみた。

千里先でも見通すことが可能になるスキルだが、上空から地上を俯瞰するといった使い方も可能らしい。

おおっ、しかも縮尺を変えたり、場所を移動したりできるぞ。

まるでグーグ〇マップみたいだ。

『念のため伏字にしておきました』

おお、助かる。って、何でグーグ〇マップ知ってるの!?

「かなり遠くまで見ることができるとな」

『ちなみに〈鷹の目〉スキルであればせいぜい半径数百メートルが限度ですが、〈千里眼〉は軽くその数千倍の範囲まで見通すことが可能です』

グーグ……じゃない、〈千里眼〉で森を見ていると、砦のようなものを発見した。

『その砦がオークの巣です』

「よし、行ってみよう。捕らわれのくっ殺騎士がいるかもしれないからな」

『この世界にそんな文化はありません』

くっ殺騎士まで知ってるナビ子さん、すげえ。



ナビ子さんが言うには、砦にはオークが棲息しているらしい。

『……その呼び名、やはり変えませんか？』

「ナビっちとかはどうだ？」

『マスターに期待したわたくしが愚かでした』

俺は木々を掻き分けるようにしてその砦へと向かう。

丘の上に立つ、石造りの巨大な建造物だった。

思ってたより大きいな。普通に攻略するとなかなか骨が折れそうだ。

ちなみにオークは知能が低く凶暴で、この世界では敵性生物として認識されているという。

巫人とかではなく、魔物扱いということだ。

砦の門扉は固く閉ざされていて、周囲を囲う石壁の高さはゆうに四メートル以上ありそうだ。

石壁の上を監視役のオークたちが巡回していた。

「さて。あの中にくっ殺騎士がいると仮定して、どうやって助けにいかうか。正面から？」

『その仮定については理解しかねますが、マスターであれば内部への侵入は容易です。あの程度の門など容易く破壊可能ですし、あるいは壁を飛び越えて侵入することもできます』

なるほど。

「バレずに侵入することはできないのか？」

『可能です。〈隠密・極〉スキルをお使いください。しかし、わざわざ身を潜める意味はないのでは？』

「ばっか。くっ殺シーンを近くで見ると身を隠す必要があるだろうが！」

『……なぜ怒られたのか、まったくもって理解できないのですが』

俺は隠密スキルを使ってみた。

「これでバレないんだな？」

『はい。〈隠密・極〉であれば、すぐ目の前まで接近したり、大声で叫んだりしない限り、オーク程度に見つかることはないでしょう』

ほとんど光学迷彩並みだな。

俺は砦の正面まで堂々と歩いていく。

ナビ子さんが言う通り、巡回しているオークがこちらに気づく様子はない。

すげー。マジで俺が見えてないみたいだ。

俺はその場でズボンを下ろしてみた。

パンツも脱ぐ。

風が股間を撫でていき——超開放感！！

『……そんな汚いものを晒して、一体何をされているのですか、マスター？』

「いや、見えてないと分かると、裸になってみたくなるのが人間の心理ってものなんだよ」
ていうか、汚い言うな。

俺はジャンプして石壁の上に飛び乗った。

あ、ズボンはちゃんと穿き直したぞ。

そのまま砦の中へと侵入する。

『マスター。砦の中にオーク以外の生物と思しき生命反応があります』

「すげえ、ナビ子さんってそんなことまで分かっちゃうのか」

『はい。探知機能も搭載されておりますので。もつとも、およそ半径二百メートル以内と、範囲は限られています』

「へえ」

それでもナビ子さん有能過ぎだろ。

『マスターも探知が可能です。〈探知・極〉スキルをお持ちですので。なお、地形、建物の構造、熱源、魔力、敵性個体、トラップなどを詳細に探知できます。有効範囲はおよそ半径三キロメートル』

俺の方が有能だった。

ちなみに〈探知〉はこちらの意志に応じて発動するアクティブスキルであるが、〈感知〉という意志に無関係に発動するパッシブスキルもあるようだ。

俺は〈感知・極〉を有していて、危険やトラップ、気配、悪意、殺意などを自動で感知してくれ

るという。

実際に探知能力を使ってみた。

「おお、砦の構造が手に取るように分かるぞ」

地図要らずの便利能力だ。

砦の中心に建つ尖塔に、多くのオークたちが集まっていた。ギャグじゃないぞ！

その中に、一人だけ違う種族が交ざっているようだ。

「くっ殺騎士はここだな！」

『まだ人間とは決まっていますし、人間だとしても男かもしれません』

「オークに捕まっているのは女騎士って相場が決まってるんだよ！」

『……』

ナビ子さんの何か言いたそうな気配を感じつつも、俺はその場所へと急いだ。

すぐに辿り着く。

いたぞ！ やっぱり女騎士だ！

美しい白銀色の甲冑に身を包む、赤い髪の少女だった。

天井から吊るされた鎖で手足を縛られた彼女は、その端正な顔を歪め、苦悶の表情を浮かべている。

その周囲には、下卑た笑みを浮かべたオークたち。

「くっ……殺せ！」



くっ殺、いただきました！

って、喜んでる場合じゃない。

——じっくり観賞せねば！

『……助けにきたのではないのですか、マスター？』

ナビ子さんの指摘を無視して、俺はオークたちに交ざった。

バレないよう、ブヒブヒ鼻を鳴らすことも忘れない。完璧だ。

「っ！ き、貴様は人族^{ヒューマン}っ？ なぜそんなところに……っ？」

ドキドキワクワクしながらこれから行われるであろう蛮行を待っていると、女騎士が俺に気づいた。

くっ……なぜバレた!?

『さすがにそこまで堂々と目の前に陣取っては察知されます』

どうやら最前列の特等席に座ったのがいけなかったらしい。映画館でも一番前に座るタイプです。

「ブガっ!? (何者だ!?)」

「ブヒィッ? (どこからッ?)」

「ブヒヒ! (人族だ!)」

遅れて俺に気づいたようで、オークたちがブーブー鼻を鳴らし始める。なぜか豚語(?)が理解できたのは、〈言語理解・極〉スキルのお陰だろう。

俺は颯爽^{まっさら}と前に出た。

「助けにきた。もう大丈夫だ」

「今オークたちに交ざって觀賞しようとしてなかったか!？」

「気のせいだ」

そう言って安心させつつ、俺は女騎士の身体を抱きかかえた。

当然、これはセクハラじゃなくて救出活動の一環だ。

ちよっと手元が狂って、胸当てからはみ出た乳をふにっとしてしまったのは事故である。この女

騎士、おっぱいマジでかい。

オークどもが一斉に襲いかかってきた。

女騎士を抱えたままこいつらを相手にするの結構大変そうだな。

『マスターは〈時空魔法・極〉をお持ちですので、転移魔法を使ってください。それで砦から脱出できます』

例のごとく、使い方は頭の中にインプットされていた。

「レポート」

「う、うわあああっ!？」

女騎士が甲高い悲鳴を上げる。

俺は彼女を抱えたまま、砦の上空百メートルくらいの場所に転移していたのだ。今は風魔法を使って空中に浮かんでいる。

「もしかして高いとこダメだったか?」

「し、死ぬっ……死ぬっ……助けてくれえええっ!」

さっきオークに向かって殺せって言ってたよな?

女騎士は目を回しているが、とりあえず我慢してもらおうしかない。

俺は〈自然魔法・極〉というスキルを持っている。

自然魔法というのは、この世界の自然現象に関わる魔法全般を指している。

風を操作する魔法もその一つだ。

『なお、風魔法の他に、火魔法、水魔法、土魔法、雷魔法などが一般的です』

俺は続いて火の魔法を試してみることにした。面倒だし、砦の中にいるオークをまとめて焼き豚にしてやろう。

他に捕まっている人はいないみたいだしな。

「超級魔法〈地獄ノ業火〉」

『……マスター、オーバーキルにもほどがあるかと』

「え?」

直後、巨大な魔法陣が虚空に展開されたかと思うと、凄まじい火炎放射が砦を襲った。

一瞬にして砦が炎に包まれ、火柱が天へと突き上がる。

かなり離れた位置にいるというのに、その熱風がここまで吹きつけてきた。

「な、な、な……」

女騎士は目の前の光景に声も出ない様子。
てか、俺もびっくりしてる。まさかこんなとんでもない威力だなんて思わなかった。
森まで燃えてるし。

って、やっべ！ このままだと森ごと全焼してしまう！

俺は慌てて別の魔法を発動した。

「超級魔法〈フラッドミクス〉」

『……マスター、もしかしてワザとやっていますか？ この辺りの地形でも変えるつもりですか？』
「うそん」

今度はバケツをひっくり返したような豪雨が、燃え盛る岩に降り注いだ。

幸い火はあつという間に消えたが、周囲の木々が濁流に呑み込まれて薙ぎ倒され、辺り一帯が池のようになってしまう。

岩も一緒に流されたようで、跡形もなくなっていた。

「うん、次からはもっと威力の低い魔法にしよう」

『ぜひそうしてください』



第4話 女騎士は大抵脳筋

水浸しになった場所を避け、俺は地上へと降り立った。

地面に下ろしてやると、女騎士は腰を抜かしてしまったのか、へなへなぺたんとその場に尻餅しりもちをついた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。た、助けてくれたことには礼を言う。だ、だが、貴様は一体、何者なのだ……？」

「俺はカルナ。ただの旅人だ」

「ただの旅人って……超級魔法を連発しておきながら、ただの旅人はないだろう!? あんな魔法、うちの宮廷魔導師にも使い手がないぞ！」

そんなにすごい魔法だったのか。まああの威力だからな。

『この世界の魔法は、初級、中級、上級、超級、神級の順で威力が上がっていきます。神級魔法の使い手など、人間や亜人に限れば数百年に一人というレベルです』

ナビ子さんが教えてくれる。

声にはやや呆れが混じっていた。

……てか、本当はそのさらに上の神級魔法を使うつもりだったんだが、一段階抑えてみたんだ

よね。

神殺だったら森ごと消滅してたかもしれない。危なかった。

「ま、まあいい……あ、あたしはエレン、アルサーラ王国騎士団に所属する騎士だ」
女騎士はどうにか立ち上がりつつ、そう名乗った。

エレン 18歳

種族…人族

レベル…39

スキル…〈剣技〉〈怪力〉〈闘気〉

生命…1087/1132

魔力…91/91

筋力…401

物耐…368

魔耐…242

器用…331

敏捷…304

運…81

ふむ。

確かに騎士に相応しいステータスを持っているようだ。たぶん。ていうか、この世界の相場を知らないのです、強いのかどうか俺には判別できない。

『強いです。いっぱいしの戦士の基準がオークを単独で討伐できるととされていますが、彼女なら隣殺できるでしょう』

あ、やっぱりオークはそういう位置づけなのね。

なお、SからFまでの七段階で示されるといいう危険度において、オークはCらしい。

まあ俺も隣殺できるけどな！

『……なぜ張り合ったのですか？』

ところで、アルサーラ王国って？

『質問にはスルーですか。……主に人族が暮らしている国で、今マスターがいるこの場所はその領地内です。この森を出て東に四十キロほど進めば王都があります。アルサーラ騎士団は王都周辺の防備を任されている他、魔物の討伐なども行っているようです』

しかし普通、騎士が一人でオークの砦（やぐら）に挑むものなのか？

『そこまでは分かりかねます。ですが、マスターの〈鑑定・極〉を使えば、さらに彼女の情報を引き出すことができるかもしれません』

へー、鑑定ってそんなことまでできるのか。

身長 166センチ
体重 57キロ
B 91 W 57 H 90

『マスター。誰がスリーサイズを調べろと？』
「っい。」

しかしGカップか……すごくいいね！

『……称号を確認してみてください』

称号…アルサーラ王国王女 アルサーラ騎士団団長

「って、王女？」

ただの女騎士ではなく、姫騎士だったのか！

「っ？ なぜあたしが王女だと分かったのだ!？」

あ、やべ。

鑑定で判明した情報を、つい口走ってしまった。

「王族っぽいオーラがあった」

「オーラ」

「あと、こういうところでいきなり身分の高い女性に出会うのはお約束だからな」

「?????」

適当に誤魔化すと、エレンは「何を言っているのだ？」という顔になった。

『著名な人物であれば、基本情報を知ること可能です』
なるほど。

・エレン…アルサーラ王国現国王の三番目の娘。女ながら剣の腕前は国内でも指折り。現在、アルサーラ騎士団団長を務めている。

「ただ、かなりの脳筋で、よく単身で魔物の群れに突撃しては危険な目に陥っている、と」

「だ、誰が脳筋なのだ!？」

「今日も単身でオークの砦に突っ込んでいったはいいが、予想以上の戦力に敗北して捕まっ
まったところか」

「なぜそれを!? い、いや、あたしは負けてなどないぞ！ 向こうに魔法を使えるオークメイジが
いて、睡眠魔法で眠らされてしまっただけなのだ!」

「それを負けたというんだ」

「まったく、正々堂々と向かって来ぬとは！ 武人の風上にもおけぬオークだな!」

その発想が完全に脳筋だった。

単純なステータスで言えば、並みのオーク程度では相手にならない強さなんだけどなあ。

『どうやら頭の方が残念なお方のようですね』

「ナビ子さんって俺以外にも普通に辛辣なんだな……」

そのとき、どこからか声が聞こえてきた。

「なっ、砦がなくなっている!？」

「なんだこの湖は!? 一体何が……?」

すいません。俺のせいです。

「そんなことより姫さ——エレン団長はどこだ! エレン団長! エレン団長!」

「おい、呼ばれているぞ?」

「む。どうやら追いついてきたようだな」

エレンが率いる騎士団らしい。

きつと苦勞してるんだらうなあ。

「カルナと言ったな? 貴様はこれからどうするつもりなのだ?」

「とりあえず王都にでも行ってみるかな。その後のことは考えてない」

「ならば、ぜひ一度、城に足を運んでくれ。今回の礼をしたいのだ」

「いいよ、礼なんて」

おっぱいちょっと触らせてもらったし。

「そういうわけにはいかぬ。もしカルナが来てくれないければ、あたしは……その……た、大変

なことになっていた!」

「裸に剥かれてオークたちに輪姦されてただらうな」

「言うな! わざわざ濁したのに!」

エレンは顔を真っ赤にした。かわいい。

『今の発言はセクハラです、マスター』

異世界にもそういう概念あるの!?

「そ、そういうわけだから、必ず城まで来るんだぞ! あたしの名前を衛兵に告げればいいから!」

「分かった。そしたらおっぱい揉ませてくれるんだな」

「そんな礼をする予定などない!」

なんだ……ないのか。

『マスターこそ、セクハラを自重する気はないのですか?』

もちろん、ない!

『……』

エレンがこちらに背を向けて歩き出す。

だが何を思ったか、途中で足を止めて振り返ると、

「あと、あたしは別に高いところが怖いわけではないぞ! ただ少しびっくりしただけだからな!」

やっぱり怖かったんだな。



「すげえ！ 獣人がいる！ほんとに獣耳だ！ あっちにいるのはドワーフか!? 筋肉すげえ！ おおお、向こうにいるのはホ○ット!? かわいい！」

お上りさん状態の俺を、道行く人々が胡乱な顔で見ながら通り過ぎていく。

『マスター、明らかに不審者です。涎を垂らして幼女にしか見えないホ○ットをガン見しては、衛兵にしょっぴかれかねません。……なお、こちらも権利的な問題により伏字処理をしておきました』

「仕方ねえだろ。夢にまで見た異世界の街にやってきたんだからな！」

ここはアルサーラ王国の王都だ。

アルサーラ王国は、人族が治めている国ではあるが、多民族との交流も深く、そのためドワーフなどの亜人も多く住んでいるという。

遠くには城が見える。

あの脳筋の家だとは思えないほど立派な城だな。

さて。

どうするか。

やっぱ異世界って言ったたら、冒険者ギルドかな。

教えてナビ子さん。

『ご自身で探知することも可能ですが?』

「面倒」

『……ここは街の西側ですが、ギルドは街の東にあります。あの大通りを真っ直ぐ進んでください。三階建ての銀色の建物ですので、近くまで行けば猿でも分かるでしょう』

「おっけー」

そして、徒歩およそ三十分。

「派手な建物だな……」

ギルドは三階建てで、外壁は銀箔でも塗っているのか、キラキラと輝いていた。

すごい存在感だ。これは確かに猿でも間違わないだろう。

一階が受付になっていた。

どうやらここで仕事の依頼や受注ができるらしい。

そして二階は酒場。

三階はオフィスのようだ。

おっと、どうやら地下もあるらしい。

地下は闘技場になっているようで、冒険者たちの訓練場として利用されるほか、時々、ギルド主催の見世物なども開催されているようだ。

「さて。早速、冒険者登録をするか」

俺は受付へと向かう。

ちょうど人の多い時間帯だったのか、結構並んでいるな。
窓口は三つあって、それぞれ五人、三人、二人が待っている。
俺は五人の列の最後尾に並んだ。

『マスター。なぜあえて人の多い列に？』

「バカ、受付嬢は美人に決まってるだろ」
そこは絶対に譲れないところだった。



第5話 ステータスを怪しまれた

十五分ほど並んで、俺の番がくる。

「いらっしやいませ。どのようなご用件でしょうか？」

残念ながら定番のエルフ族ではなかったが、かなり美人の受付嬢だった。
俺は彼女のステータスを鑑定した。

リユーナ 20歳

種族…人族

身長160センチ

体重49キロ

B 84 W 55 H 82

エレンほどではないが、なかなかスタイルもいい。Eカップくらいかな。
『だからなぜスリーサイズを？』

俺はナビ子さんの呆れ声を無視し、受付嬢に用件を伝える。

「冒険者登録をしたかったんだが、君を見て気が変わったよ。どう？　これから俺と一緒に喝茶でも？」

『……なぜいきなり口説いているのですか、マスター。しかもどう見ても相手は仕事です』
受付嬢はにっこりと微笑んで、

「はい。冒険者登録ですね。推薦状はお持ちでしょうか？」

「あ、スルー？」

「頭のおかしな冒険者さんの対応には慣れてますので」

あ、そうなの。さすがはプロですね。

というか、今さらつと酷いこと言われたよね？

しかし、まいったな。

登録には推薦状が必要なのか……。

エレンに頼んで作ってもらおうか。

けど、さっき会ったばかりだしな。

なのにもう城に会いに行ったりなんかしたら、「そ、そんなに早くあたしに会いたかったのか！

仕方のないやつだな！」なんて頬を赤くしながら言われそうだ（妄想）。

「推薦状はお持ちではなさそうですね」

「あ、はい、すみません……」

「ふふ、大丈夫ですよ。風貌からして、絶対お持ちではないだろうと思っていましたから。念のた

めの確認です」

「俺、貶されてね!？」

綺麗な顔してなかなか辛口な受付嬢だった。

「ですが、ご安心ください。推薦状をお持ちではない場合も、定期的に開催されている試験に合格していただければ登録が可能です」
なるほど。

訊けば、試験内容は筆記と模擬戦らしい。

模擬戦はともかく、ペーパーテストか……。

俺、この世界の常識とか何にも知らねえぞ？

『問題ありません、マスター。ギルドの加入試験程度の問題であれば、わたくしが解答をお教えできるでしょう』

おお、さすがナビ子さんだ。

「実はちようど今日の午後、試験が行われる予定です」

「よし、受けよう」

「ではまず、ステータスを計測させていただきますね」

そう言って受付嬢が取り出してきたのは、水晶玉のような道具だった。

それを〈鑑定・極〉スキルで鑑定してみると、

「鑑定具ですね。かなり高価なもので、どのギルドにも置かれています。もともと、マスターの〈鑑定・極〉と比べれば大きく性能は劣りますが」

この水晶玉に触れると、ステータスがプレートに表示されるらしい。

「これ、見られても大丈夫なのか？」

「……一応、問題ないでしょう」

頷くナビ子さんだが、なぜか少々歯切れ悪かった。

「表示されるのは名前とレベル、それから筋力値や敏捷値などの各アビリティくらいのもので。それからもし犯罪歴があればバレてしまいます」

俺は犯罪歴がないから大丈夫だな。

『はい。この世界ではまだありませんね。今のところ』

ナビ子さんや、前の世界ではあったかのような口振りはやめてもらえませんか？

あと、今後も犯す気はありません。

「試験を受けるためには最低限の能力が必要となります。また、過去に犯罪歴があるかどうかも分かりますので、ご注意ください」

「これで能力を見れるのであれば、わざわざ模擬戦をする必要はないんじゃない？」

「……よく言われます。ですが、そういう決まりですので」

お役所みたいな返答だった。

いや、単に実力を見るだけの模擬戦ではないのかもしれない。最低限、冒険者ギルドの名に泥を塗らない人物であるかどうかを確かめるための、面接も兼ねているのだろう。

『マスターの人格ですと少々心配です』

おいこら。

俺は鑑定具へと手を伸ばし、触れた。お、意外と柔らかいな。

「……それはわたしの手です」

「おっと、失礼」

『マスター、隙あらばセクハラをかますのはおやめください。さすがの受付嬢も笑顔が引き變っておられます』

改めて俺は鑑定具に触れた。

「ええと、お名前はカルナさんですね。犯罪歴は………ない？」

「何で犯罪歴がないことに驚いてるんですかね？」

受付嬢は、ごほん、と咳払いして、

「レベルは………21ですか」

どうやらオークを大量に倒したことで一気に上がったらしい。

『マスターは〈経験値上昇・極〉を持っておられるので、レベルが上がりやすくなっています。また〈成長率上昇・極〉のお陰で、ステータスも上昇しやすいです』

「……はあっ!？」

突然、受付嬢が頓狂な声を上げた。

目を丸くし、鑑定具と繋がっている表示プレートをまじまじと見ている。

それから少し焦った様子で、

「も、申し訳ありません。どうやら鑑定具が壊れてしまっているようです」

「ん？ いや、普通にちゃんと表示されているぞ」

「そ、そんなはずがありませんっ。こんな数値、どう考えてもおかしいですし……」

俺のオールカンストした能力値を見て、あり得ないと判断してしまったようだ。

「こ、困りましたね……。ギルドにある鑑定具はこれ一つ……修理には時間がかかりますし、何よ

り次の試験は一か月後……」

受付嬢は弱った顔をして悩んでいる。

それから自分の手を鑑定具に乗せてみて、

「あれ？ 普通に計測されている……?」

だって壊れてねーもん。

おい、どうするんだよ、ナビ子さん？

『やはりこうなりましたか』

予想できていたなら先に言えよ。

『どのみち、どうしようもありませんでした。魔法で改変しておくという方法もあったのですが、

万一のことを考えて提案しなかったのです』

もし魔法でのステータスの隠蔽がバレると二度とギルドへの登録ができなくなり、さらには犯罪者として罰せられるという。

「申し訳ありません。少し、ギルドマスターに相談してきますので」

受付嬢はそう言って奥へと引っ込んでいった。

しばらくして戻ってくる。

「お待たせしました。カルナさんはレベル21とのことで、十分に受験資格を満たされており、こちらに名前をご記入いただければ、申し込みの完了とさせていただきます」

どうやらアビリティの件はなかったことにするらしい。

いいのか、それで。俺としてはラッキーだけだな。

『このギルド長は仕事がテキトウであることで知られています。一人の受験生のために、わざわざ専門の鑑定士を呼ぶのは面倒だと判断したのでしょうか』

お役所仕事も時には役に立つものだな。

まあもし今日の試験を受けられなくても、エレンに頼めば推薦状を貰えただろうけど。

それから俺はまず筆記試験を受けた。

ナビ子さんのお陰で楽勝だった。

合否はすぐに出るらしく、受付で待っていたら名前を呼ばれた。

先ほどと同じ、バスト84センチ、Eカップの美人受付嬢だ。

「カルナさん。……………合格です」

どこか腑に落ちない顔で試験結果を伝えられる。

「満点ですね……。わたしがギルドで働くようになって初めて見ました」

全問正解だったようだ。

『当然です』

ドヤ声のナビ子さん。

「では、これから次の試験がありますので、地下の闘技場に移動してください」

さてと、次は模擬戦だな。

『マスターであれば余裕で突破可能でしょう』

「腕が鳴るぜ」

『……むしろ手加減してください。マスターが本気を出してしまうと、建物ごと破壊しかねませんのよ』



第6話

ギルドマスターは犯行の隠蔽を自論む

「おお、けっこう広いな」

地下の闘技場はなかなか立派なものだった。

すでに試験を受ける受験者たちが集まっている。俺を含めて全部で六人。いずれも筆記試験を突破した連中だ。俺以外はみんな十代だろう。

試験の内容は、試験官を相手にした模擬戦だ。

「俺が試験を担当するギースだ」

筋骨隆々の禿頭のおっさんが出てきた。頬には大きな傷跡があり、いかにも冒険者といった風貌だ。もしくはヤクザ。

ギース 42歳

種族…人族

レベル…36

スキル…〈剣技〉〈闘気〉

生命…908/924

魔力…63／63
筋力…312
物耐…322
魔耐…209
器用…263
敏捷…280
運…127

レベルはエレンより少しだけ劣るくらいか。

試験は申し込み順で行われ、俺は最後だった。

受験者たちを鑑定してみたが、どいつもレベル10前後だ。

あのおっさんと戦っても、ほとんど子供のようにあしらわれて負けるに違いない。

「よし、全員一緒にかかってこい」

と思っていたら、どうやら一度に相手をするらしい。

さすがに一对六には抵抗があったのか、受験者たちは困惑の表情を浮かべる。

「いいから来いよ。もちろん全力でな。安心しろ、お前らごときじゃオレには傷一つ付けられねえよ。もし一撃でも当てることができたら、最初からDランクにしてやる」

おっさんに挑発され、さらには褒美まで提示されたことで、受験者たちは一斉に目の色を変えた。

『冒険者のランクにはFからSまであります。駆け出しはF。二つ上のDランクに上がるためには、最低でも一年はかかると言われています。もちろん、ランクが高い方が依頼を受けやすく、その分、稼ぎやすくなります』

ナビ子さんが教えてくれる。

俺も他の受験者たちに交じって、闘技場の中央へと歩を進めた。

そんな俺を、おっさんが訝しげに見てくる。

「……まさかお前、素手で戦うつもりか？ 見たところ杖もねえし、魔法使いではなさそうだが……」

あ、しまった。

俺、完全に手ぶらだった。

まあいい。適当に誤魔化そう。

「俺は武闘家だからな」

「武闘家か。あまり強そうには見えんが……」

嘘ではないぞ。〈武神〉スキルを持つ俺は、体術もマスターしているのだ。

そして試験が始まった。

合図とともに、我先にと受験者たちが一斉に試験官に躍りかかる。俺以外の。彼らにはもう先ほどまでの躊躇はない。本気でDランクを狙うつもりだろう。だが、そう甘くはいかなかった。

「遅え遅え」

「っ!？」

「おらよ」

「がっ」

「見え見えだ」

「くっ?」

試験官のおっさんは蝶のように舞い、五人がかりの猛攻をひらりひらりと躲しては、逆に素早く斬撃を当てていく。と言っても、剣の腹だが。

それでも大きなダメージを負い、五人の受験者たちはその場に膝を折った。

「ふむ。お前とお前は合格だ。もちろんFランクのな。あと三人は不合格。もっと強くなって出直してこい」

手も足も出なかったせいか、合格を言い渡された二人に喜ぶ様子はない。不合格となった三人はがつくりと項垂れた。

「で、今のままだとお前さんも不合格だが?」

彼らの戦いを傍観していた俺に、おっさんが視線を向けてくる。

「そいつらが負けるのを待ってたんだよ。おっさんと一対一で戦いたくて」

「はっ、随分と自信があるじゃねえか。なら、いつでもかかってきていいぞ」
おっさんこそ随分と自信满满だな。

だったらこっちからいかせてもらうぜ。

オークはスプラッタになったが、このおっさんなら多少は力を出しても大丈夫だろう。せつかくだから知っている体術を試してみることにするか。

——縮地。

「なっ……?」

突然目の前に現れた俺に、おっさんが目を見開く。

縮地ってのは、相手との距離を瞬時にして詰める技術だ。

と言っても、相手の意識の隙を突くことでそう見せているだけで、転移魔法のようにワープしているわけじゃない。

「くおっ!」

さすがは熟練の冒険者と言うべきか、おっさんは即座に身を横に投げ出した。

お陰で俺の拳は空を切ってしまう。

あ、さすがにちょっと手を抜きすぎたかも?

今で決着をつけてしまうつもりだったんだけどな。

「は、ははははははははっ! やるじゃねえか! こいつは、オレも本気を出さなきゃならねえみたいだな!」

俺の実力を悟って、おっさんがいきなり笑い出す。

このおっさん、あれか。

強えやつ見っとオラわくわくしてくっぞ、ってタイプか？

「おおおおお！ 〈闘気剣〉ッ！」

しかもなんか必殺技っぽいキターーッ！

剣が煌々と光っていた。

おっさんが地面を蹴り、大上段からそれを振り下ろしてくる。

って、その距離だと当たらなくね？

たぶん目測を誤ったのだろう。

ったく、しょうがない奴だな。

俺は前に出た。

「真剣白刃取りッ！——って、あれ？」

おっさんの剣を両手で挟み込もうとして、俺は相手を舐め過ぎていたことを悟る。

止められなかった。

てか、手が刃に弾かれたんだけど！

『闘気のせいです。剣に纏わせることで、攻撃力、切断力が大幅に上昇します。さすがに素手で受け止めるのは難しいかと。せめてマスターも闘気をお使いください。〈闘神〉スキルを持っておられますので』

いやそれもっと早く教えてよ、ナビ子さん。

次の瞬間、おっさんの剣で俺の身体は斬り裂かれていた。

「何で自分から前に出てきやがるんだよおおおっ!？」

愕然と目を見開いて叫ぶおっさん。

いやいや、受験者相手にこんな物騒な技を使うあんたが悪いって。

ぶしゅわつ、と血が噴き出す。

試合の様子を見ていた受付嬢、顔面蒼白。

こうして俺の異世界での新しい人生は、呆気なく幕切れに——

——って、まだ続くよ？



「何で自分から前に出てきやがるんだよおおおっ!？」

「いやあ、取れると思ったんだけどなあ」

「アホか！ 素手で闘気纏った剣を掴めるわけがないだろ！ しかもこのオレの全力の一撃だぞ!？」

「あれ全力だったのかよ。手加減しろよな。普通なら死んでたぞ?」

「新人ごときに舐められてちゃ、ギルドマスターとしての沽券に関わる！ だからここでしっかりビビらしておいてやるうって思ったんだよ!」

「しかも理由が最悪だった！」

てか、このおっさんがギルドマスターだったのか。

「くそつたれっ、マジでどうすりゃいいんだ！ 冒険者ならともかく、まだ登録前の素人をこんな目につ……。このままじゃ、オレは責任を取って辞任……………よし、ギルドには来なかったことにして死体は森にでも……………」

「隠蔽する気まんまんかよ」

「お前が死ぬからいけねえんだろがッ！」

「そして逆切れか」

「——って、何でまだ生きてるんだああ!?」

ようやく気づいたんかい。遅えよ。

そう。

俺はピンピンしていた。

「傷が、ない、だと……………」

「治った」

「そうか、治ったのか—— って、いやいやいや、治るわけねえだろ!? お前、オレの必殺技をまともに喰らったんだぞ!? 必ず殺すと書いて必殺技だぞ!?」

「いやあー、何かの見間違いつて線も?」

「そんなわけあるか！ そもそもオレもお前も血だらけじゃねえか！ いや、意外と血の量が少

ねえな……………」

先ほどの一撃は、確かに俺の身体を斬り裂いた。

いや、身体というか、額だな。

しかし頭だからそこそこ血は出たが、傷自体はそれほど酷くなかった。

俺のリミットブレイクした物耐値のお陰だ。

『先ほどのダメージは128でした。マスターの生命力はいったん「9923／9999」になりましたが、一秒後に自動的に回復して「9999／9999」に戻りました』

しかも俺には〈自然治癒・極〉というスキルがある。

あつという間に受けた傷が治り、生命力が回復してしまったのだ。

『なお、計算が合わないように思われるかもしれませんが、それはマスターの実際の生命力が9999を超えているからです』

「おい、一体どんな手を使ったんだよ!」

おっさんが詰め寄ってくる。

「女神の加護か!? それとも何らかの補助魔法で……………」

うーん、あんまり自分の手の内を明かしたくないんだよなあ。

よし、誤魔化そう。

「おっさん、一応まだ試験中ってことでもいいんだよな?」

「は?」

「秘技、さっきのお返し拳ッ！」

「……ぐべっ!？」

俺はおっさん、もといギルドマスターをぶん殴り、昏倒させた。泡を吹いてるけど、まあ生きてるだろう。

『894のダメージです。現在の彼の生命力は「14／924」。……瀕死状態です』

うお、やっべ。

もうちよっとで死なせるとこだった……テヘペロ!

『まったく可愛くないです、マスター』

そんなこんなで俺は試験に合格し、晴れて冒険者になったのだった。



第7話 S級ダンジョンに装備無しで挑んでみる

美人受付嬢のリユーナさんから、冒険者の会員証を発行してもらった。

「そ、それでは、カルナ様のご武運を、お、お祈りしております……」
めっちゃ俺にビビってた。

まああんなの見せられたら仕方ないか。

ちなみに俺のランクはDである。

通常はFからのスタートなのだが、ギルドマスターに一発喰らわせることができたため、約束通りにDランクにしてもらったのだ。

服は着替えた。

血で赤く染まっていたこともあり、あの後しばらくして目を覚ましたギルドマスターがくれたのだ。

なぜか俺を見る目が泳いでいて、あれ以上、深くは追及してこなかった。

『なぜか何も、マスターの規格外の力に怯えただけです』

「確かに、ちよっと失禁してたっぽいもんな」

『マスター、そこは気づいたとしても触れないで置いてあげましょう』

さて、せっかく冒険者になったんだし、なんか依頼でも引き受けるかな。

『現在マスターは無一文ですし、早急に今晚の宿代と食事代を確保する必要がありますね』
おっと、そうだな。

俺、この世界の金を一円も持っていないんだった。

……円じゃないだろうけど。

『この世界では主に、銭貨、銅貨、銀貨、金貨、大金貨が利用されています。それぞれの価値については、銭貨千枚⇨銅貨百枚⇨銀貨十枚⇨金貨一枚と考えていただいて構いません。大金貨は変動が大きいですが、おおよそ金貨三十枚の価値があります』

「昼食の相場はどれくらい？」

『銅貨五枚から六枚といったところでしょいか』

なるほど。ということは、銅貨一枚は日本円だとだいたい百円くらいの価値ってことか。銀貨で千円、金貨で一万円だ。分かりやすい。

俺は掲示板のところへ移動した。

色々な案件が張り出されているな。

依頼にもFからSまでのランクがあるらしく、当然、ランクの高い依頼ほど成功報酬が高い。

ランクによる制限が設けられている依頼もあった。

Dランクなら大抵のものは受けることができるみたいだが、やはり高レベルのものとなるとCラ

ンク以上とか、Bランク以上という条件が書かれていた。

「ダンジョンに行ってみいな」

掲示板には、ダンジョンの情報が書かれた紙も貼りつけてあった。王都を拠点にしている冒険者たちが主に活動しているのは、以下のダンジョンらしい。

ダンジョン『小鬼の巢穴』

難易度…F（攻略済み）

場所…王都北部の森。片道1時間弱。

主にゴブリンが棲息している洞窟型の迷宮。

ダンジョン『シルザ廃鉱山』

難易度…E（攻略済み）

場所…シルザの町北東部。片道4時間。

主にコボルドが棲息している鉱山型の迷宮。

ダンジョン『ルーアン遺跡』

難易度…C（攻略済み）

場所…王都南部の廃墟。片道2時間強。

ダンジョン化した古代遺跡。ゴーレムの他、獣系の魔物が棲息している。

ダンジョン 『奈落の大穴』

難易度…B（攻略済み）

場所…ラザ山の麓。片道7時間。

ラザ山南部の樹海に開いた巨大な大穴。下級悪魔が出没する。

……うーん。

どれも攻略済みだな。

「やっぱダンジョンと女の子は初物がいいよなー」

『今、マスターの性癖を暴露する必要がありましたか？』

「おっ、もう一つあるじゃん」

ダンジョン 『大賢者の塔』

難易度…S（未攻略）

場所…王都南部。片道5時間。

古の大賢者オーエンが遺したとされる塔。百階層からなり、上層に進むほど魔物が強力になる。下層の難易度はD。

これは未攻略のようだ。

ナビ子さんによれば、大賢者オーエンというのは、魔導の真髄を究めたとされる超有名な魔術師らしい。

二百年くらい前に生まれた人族なのに、現代の魔術師でも未だ解明できていないような魔術を幾つも使っていたという。

『大賢者の塔』は、そんな彼が晩年に建造し、引き籠ったという巨大な塔です。その最上階には、彼が遺した貴重な研究資料が大量に保管されているのではないかと言われています。ですが、未だ誰一人として最上階にまで辿り着いた者はいません』

そんな人物の研究資料ともなれば、途轍もない価値を持っているだろう。

『なお、このダンジョンの攻略については、この国の王様が依頼者となっています。報酬は大金貨一千枚です』

決めた。

まずはこのダンジョンに挑戦しよう。



ダンジョン 『大賢者の塔』までは片道五時間かかるということだったが、風魔法で空を飛ぶと三

十分ほどで到着した。

「でかいな」

さすが百階まであるという塔だ。天を貫くかのように聳え立っている。

地震がきたら倒れそうだ。

「しかしこれ、空を飛んで、あの辺の外壁をぶち破って中に入ったら簡単に最上階にいけるんじゃないのか？」

誰もが一度は考えるであろう、塔型迷宮の攻略法だ。

『可能です。ただし、結果を突破するにはさすがのマスターでも少々時間がかかります』

できるらしい。

けど、そんな方法で攻略してもつまらないよな。

結局、俺は普通のルートでダンジョンに挑むことにした。

「完全に迷路だな」

ダンジョン一階。

無数の分かれ道があつて、マップがないとあっさり迷子になりそうだ。

だが俺にはナビ子さんがいるため、簡単に正しい道順を特定することができる。(探知・極)スキルがあるので、別にナビ子さんに頼らなくてもいいのだが。

最短ルートで進んでいると、第一モンスターを発見した。

ホブゴブリンA

種 族…ホブゴブリン族

レベル…19

スキル…(怪力)

「ホブゴブか。ゴブリンよりも先に遭遇してしまったな」

ゴブリンと言えば、ファンタジー世界ではお馴染みの緑色の身体をした醜悪なモンスターだが、ホブゴブリンはその亜種。

しかし人間の子供くらいの大ささしかないゴブリンに対し、ホブゴブリンは身体が結構でかい。ちなみにゴブリンは危険度F(ただし単体)で、ホブゴブリンは危険度Dだ。

ホブゴブリンは手に棍棒こんぼうのようなものを持って躍りかかってきた。

裏拳一発。

ホブゴブリンは吹き飛んで壁に叩きつけられると、灰になって消滅してしまった。

どうやらこのダンジョン内のモンスターは、倒すと灰になってしまうらしい。

『大賢者オーエンが作り出した偽物だからです』

「へえ。エグイ死体が残らないのは助かるな」

灰に交じって、赤い宝石のようなものが落ちていた。

モンスターを動かす核になっていた魔石である。

売ればお金になるらしいので、拾っておくことにした。

『ところでマスター。今さらなのですが』

『どうした？』

『なぜ全裸なのですか？』

「いやさ、一度、装備無しでダンジョンに挑んでみたかったんだよ」

『……だからと言って、下着まで脱ぐ必要がありますか？』

「ははっ、いいじゃねーか。誰も見てないんだし。ほら、ホブゴブリンだって全裸だろ？」

『……まさか、そこで知性の乏しい魔物を引き合いに出してくるとは思いませんでした。さすがです
ね、マスター』

「それほどでも」

『いえ褒めてません』

もし他の冒険者に遭遇したら〈隠密・極〉を使えば問題ないしな。

ちなみに服はすべて、〈無限収納〉スキルによって生み出せる亜空間に入れておいた。魔石や他のドロップアイテムなんかも全部放り込んでいる。容量に制限はないらしいし、非常に便利な能力である。

それからしばらく魔物を瞬殺しつつ進んでいると、次の階へと繋がる階段へと辿り着いた。

気づけば十階まで到達していた。

ぶっちゃけここまで楽勝だった。

ホブゴブリン以外にも、オーガやトルル、リザードマンといったお馴染みのモンスターが沢山出てきたが、どれもパンチ一発で吹き飛んでいったもんな。

やがて俺はだだっ広い部屋に辿りつく。

「おお、こいつがボスか」

どうやら十階ごとにボスが配置されているらしい。

十一階へと続く階段の手前に立ちはだかったのは、牛の頭と人型の身体を持つ巨大なモンスターだった。

ミノタウロス（ボス）

種族…ミノタウロス族

レベル…30

スキル…〈怪力〉

身の丈は三メートルを軽く超えている。

バカでかい戦斧せんぶを手にして鼻息荒くこちらを睨にらみ、今にも突進してきそう。なかなか強そうだ。

まあ結局ワンパンで倒したけどな。

プモーツ、という雄叫おたけびを上げながら猛進してきたミノちゃんの懐に飛び込み、拳こぶしを腹にぶち込む。

それでお終しまいだった。

壁まで吹っ飛んだ後、ミノちゃんは灰と化して散った。

「やべ。ボスキャラ瞬殺するのって快感だわ」

『相変わらずオーバーキルですね』

カルナ

レベルアップ… 21 ↓ 22

レベルが上がったようだ。

ドロップアイテムのミノタウロスの角を回収すると、俺は十一階へと進んだ。

それからも俺はガンガン塔を上っていった。

二十階のボス、キングマンティコアを蹴けり一発で片づけ。

三十階のボス、メタルゴーレムを手刀で一刀両断し。

四十階のボス、レッドグリフォンを上級魔法一撃で仕留めた。

途中、三回ほど冒険者のパーティに遭遇しかけ、慌あわてて気配を消して隠れたが（全裸だから）、三十階を過ぎるともはやモンスタールしか見なくなった。

どうやらこのダンジョン、これまでの最高到達記録が三十四階らしい。

気づいたら超えてたっぽい。

となると、もう堂々と裸かっぱで闊歩かっぱすることができるな！

『……今までも十分に堂々だったかと』

そして——俺は五十階のボス部屋へと辿り着く。

「あれ、先客がいるんだが……?」

巨大な三つ首の魔物——ケルベロスと、魔法使いっぽい格好をした一人の少女が交戦していたのだった。



第8話 エルフ少女を助けたのに逃げられた

五十階のボス部屋に辿り着くと、先客がボス——ケルベロスと戦っていた。魔法使いっぽい格好をした少女だ。

頭に被ったとんがり帽子から流れる、艶やかな金髪。

そして、ピンと先端の尖った耳——

エルフ、キターーーッ！

ティラ 21歳

種族…エルフ族

レベル…36

スキル…〈雷魔法〉〈風魔法〉〈弓技〉

生命…846／901

魔力…628／1132

筋力…274

物耐…265

魔耐…314

器用…301

敏捷…298

運…178

鑑定してみても、確かにエルフだ。

見た目は十五、六といったところだが、年齢は二十一歳だった。

『エルフ族の寿命は人間の約三倍。二百年弱と言われています』

そのエルフ少女へと三つの首が次々と襲いかかり、その華奢な体軀を噛み殺さんとしている。

しかし少女は素早いステップでそれらを回避。

同時に呪文を詠唱していたらしく、手にした杖の先端に魔法陣を展開させる。

強烈な雷撃が放たれ、ケルベロスの頭部の一つを焼いた。

『今のは中級の雷魔法です。エルフは種族的に得意とされる風の魔法しか使えないケースが多いのですが、彼女は少々珍しいタイプの方です』

直撃はしたが、あの威力じゃ致命傷にはならないだろう。

少女もそれは分かっているのか、必死に距離を取りながら再び詠唱を開始する。

というか、魔法使いなのにあの身のこなし。

ステータスの高さもさることながら、かなり戦い慣れているようだ。

それでも三つの首が相手となると、ほとんど余裕がない。しかも徐々に動きが鈍くなっていく。

息を荒くしているので、体力がキツイのだろう。

少女も何度も中級魔法をぶつけてはいるが、ケルベロスの生命力はなかなか減っていかない。三つの頭部それぞれに生命力があって、そのせいでダメージが分散されているしな。

「っ！」

ついに限界が来たのか、少女がよろめいた。

ケルベロスはその隙を見逃さず、三つの首が我先にと争って少女に迫った。

「させるかよ」

縮地。

俺は一瞬で距離を詰めると、少女の前に躍り出た。

「なっ……」

息を呑む声を背後に聞きながら、俺は闘気を纏わせた拳を横薙ぎに振るった。

ズバシユツ！

頭部右に9999のダメージ！

頭部中央に9999のダメージ！

頭部左に9999のダメージ！

爽快な斬撃音とともに、ケルベロスの三つの頭部が同時に破砕した。

カルナ

レベルアップ… 25 ↓ 26

直後、肉の塊が灰と化し、一帯に灰色の霧が舞い上がる。

「うっぺ！ 口に入っちゃまった！ ペぺっ。……あ、大丈夫だった？」

俺は口内に入った灰を吐き出しつつ、振り返る。

エルフの少女は地面にへたり込み、目を丸くして俺を見上げていた。

その頬が見る見るうちに紅潮していく。

俺はさながら、ピンチのときに颯爽と現れたヒーローだ。

これはもしかして、いきなり惚れられちゃったかもしれない？

「キヤアアアアアアアアッ!!」

「え？」

だが俺の甘い想像とは裏腹に、エルフ少女はいきなり甲高い悲鳴を轟かせたかと思うと、背を向けていきなり逃げ出した。

「ちよっ、え？ な、何で逃げるんだ!? 待ってくれ！」

俺は慌てて後を追いかけた。

「いい、嫌です！ 来ないでくださいッ！」

待ってくれと叫んでも、少女は全速力で俺から離れようとする。そのままボス部屋を飛び出してしまった。

ダンジョンの通路を走りながら、逃げる彼女に訴える。

「俺は怪しい奴じゃないって！」

「どこからどう見たって怪しいじゃないですか!? いえ絶対に見たくないですけど!」
「どういふことだ？」

俺はこんなにもナイスガイだというのに。

『……マスター。彼女の反応はもつともなものかと』

「ちょ、ナビ子さんまで？」

「はい、お先つと」

「ひいっ!」

俺は全力で床を蹴り、一気に彼女を追い越した。

エルフ少女は慌てて足を止めると、顔を真っ青にしながら後ずさった。

「ま、まさかダンジョンのこんな奥深くで、変態に襲われるなんて……」

「いや、俺は変態じゃないから。信じてくれ」

「信じる要素が皆無ですッ! そ、そんな格好してッ……」

「格好……? あっ」

少女のその言葉でハッとした。

そうだった! 俺は今、何も装備していないんだっ! 下着も。

『……まさか、マスターの脳みそがここまで腐っていたとは思いませんでした』

いや、もっと早く教えてよね?

「悪い! つい全裸だったこと忘れてた!」

「普通は忘れませんよねッ!? そもそも何でダンジョンで裸になってるんですかッ!」

「そういうプレイ(ゲーム的な意味で)」

「……ああ、お父さん、お母さん、親不孝な娘を許してください……。私は今から最悪の変態の慰み者にされるようです……」

「ちょ、泣かないでくれっ。すぐに隠すから!」

俺は両手で股間を包み込んだ。

「これで安心だろ?」

「どこがですかッ!? 早く服を着てくださいッ!」

服を着た。

しかしエルフの少女は一向に警戒心を解いてくれない。

『当然かと』

それにしても、見たところ彼女は一人のようだ。

まさかこんな上階まで単独で上ってきたのだろうか?

「もしかしてここまでソロで来たのか？ 今までの最高到達記録が三十四階なのに、信じられないな」

「五十階のボスを一撃で倒したあなたの方が信じられませんよっ」

少女は即座に言い返してきた。

「今までも全部一撃だったぞ」

「な……一体、何者ですか、あなたは……？ ……そもそも武器も持たずにこんな上階まで単独で来るなんて、ただの変態ではなさそうですね……」

『ただの変態ではなく最強の変態です。性質が悪いにもほどがあるかと』

少女が驚愕し、ナビ子さんが毒を吐く。

確かに、全ステータスがリミットブレイクした変態ってやべえな。

って、誰が変態やねん！

『マスターを変態と呼ばずして誰をそう呼べと？』

失敬な。俺はむしろ紳士だろ。

『そうですね。マスターは紳士（笑）ですね』

（笑） っつけるな。

『そうですね。マスターは紳士（全裸）ですね』

果たしてこれほど怪しい紳士がいるだろうか？

それにしても、さすがはエルフ。

物凄い美少女だ。

夜空に輝く星を流したかのような金髪に、空色の瞳。

怖ろしく端正な顔立ちに、白磁のような肌。

そして、種族の気高さを表すかのように、つんと尖った耳。

「よかったら、ちょっとだけ耳に触らせてくれないか？」

「ダメです」

一蹴された。

くそ、エルフの耳に触るのが夢だったのに！

『エルフの耳は敏感です。他人に触らせるようなことはめったにありません。ましてや、マスターのような変態であればなおさらかと』

マジかよ。

だが難しいと言われれば、かえってやってみたくなるのが人の性というもの。

「そう言わずにさ。ちょっとだけでいいから」

「ダメです」

「先っちょだけ、先っちょだけ」

「ひ、卑猥な言い方しないでくださいっ」

顔が赤くなった。かわいい。

『……やはりマスターは下変態ですね』



「そ、そんなことより、あなたもこのダンジョンの攻略を？」

「ああ。挑んだのは初めてだけどな」

「それでいきなりここまで？ ……ま、まあ、先ほどの強さを見れば納得もできますが……」

そこで少女はべこりと頭を下げてきた。

「とにかく先ほどは助かりました。たとえ変態とは言え、助けていただいたことは事実ですので、お礼を言わせてください。ありがとうございます」

律儀にそう礼を述べてから、少女は「それでは」と立ち去ろうとする。

俺はそんな彼女に提案した。

「せっかくだし、一緒に最上階まで行こうぜ」

「遠慮します」

またあっさり断られちゃったよ。

だが何を思ったか、少女は足を止めると、

「……と、言いたいところですが、私には絶対にこのダンジョンを攻略しなければならぬ理由があります。ですが今の私の実力では、この階が限界。あなたのような実力者の助力は願ってもないところです。願ってもないのですが……」

ああ、本当に変態でさえないければ……と物凄く葛藤した様子で呟くエルフ少女。

それからしばしうんうんと悩んだ後、彼女は決心したように、

「私はティラ。……もしよろしければ、しばらくパーティを組んでいただけませんか？」

「もちろん！ 初めての共同作業だな！」

「……やっぱり今のはなかったことに」

「うそうそ！ 冗談だから！」

俺は慌てて発言を取り消して、こちらも名乗った。

「ちなみに俺はカルナ。よろしくな」

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

こうしてエルフ少女が仲間になった。

「じゃあ、お近づきのしるしに耳を」

「ダメです」

※試読版はここまで。

『転生担当女神が200人いたので

チートスキル200個貰えた』は、

2017年10月15日発売です。お楽しみに！

